

2002年8月21日 オーナム祭における御講話  
ブラシャーンティ ニラヤムにて

## 我（アハム）はブラフマンなり

すべての人々が快適な生活、権力のある地位、富を切望するが、  
すぐれた知性と英知、良き人格といったものを求める者はほとんどいない  
高貴な魂の集うこの場で、これより他に何を伝えればよいだらうか

（テルゲー語の詩）

愛の化身の皆さん！

この世にあって、貧困者から億万長者に至るまで、またパマラ（知恵の乏しき人）からパラマハンサ（悟った魂）に至るまで、あらゆる人がみずからを指すものとして「私」という単語を使います。鳥や獣に言葉を発する力が与えられていたなら、彼らもまた、みずからを「私」と紹介していたことでしょう。「私」という言葉は聖典の中できわめて重要な意味をもっており、ウパニシャッドにおいて詳細に説明されています。「アハム ブラフマースミ（我 私 はブラフマンなり）」とはウパニシャッドにある言葉です。この記述から明らかなのは、ブラフマンという御名以前に「私」という言葉が存在していた、ということです。ラーマやクリシュナといった神の化身の御名は、その神性ではなく、肉体としての形態のみに対応するものです。「アハム（私）」は、神の化身たちの本当の名前、永遠の名前なのです。実際、「私」が神の最初の名前です。人々はみずからの満足と喜びのために、神をさまざまな名前と呼んでいます。しかしながら「アハム」が神の真の名前です。

人が妄想を抱く原因は心です。木をまっすぐに育てることは可能です。玉石は美しい彫像へと変わることができます。しかし、心をまっすぐに安定したものとするのはたいへん難しいのです。私たちの行うすべての霊性修行は、心を正しい道へと向けることのためにあります。人はさまざまなタイプの霊性修行を行いますが、単に一時の満足を得るだけにとどまっています。永遠の幸福を体験することは、アハムの原理を理解してはじめて可能となります。人は神性の原理を理解することができないため、さまざまな名前や姿を神と見なしているのです。

寺院を建てて、あらゆる場に浸透している唯一なる者を  
祀ることができるだろうか？

何十億もの太陽の輝きを放つ唯一なる者に  
ランプの火を掲げることができるだろうか？  
創造主であるブラフマーさえも、唯一なる者を包含することはできない  
ならば、唯一なる者を一つの姿に限定することなどどうしてできようか？  
あらゆる存在のうちにある唯一なる者に  
適切な名をつけることがどうしてできるだろうか？  
全宇宙が自身の腹の中に入っているお方に  
どうして食物を捧げることなどできようか？

(テルグー語の詩)

(訳注：ブラフマーはヒンドゥー教における、シヴァ(破壊)・ヴィシュヌ(維持)・ブラフマー(創造)の三神のうちの一つ。「唯一なる者」は、この三神を包含している存在、ないしは、それらの上位の存在であるとされる)

愛の化身の皆さん！

このはかない物質世界にあって、人は神をさまざまな名前と姿で崇拜します。しかし、実際には「アハム」のみが神の永遠なる真の名前なのです。4つのヴェーダは、この真理を4つのマハーヴァーキヤ(深遠なる金言)の中で宣言しています。「プラグニャナム ブラフマー(ブラフマンは至高の意識である)」、ナ「アハム ブラフマースミ(我はブラフマンなり)」、ナ「タットワマシなんじ(汝はそれなり)」、ナ「アヤム アートマ ブラフマー(この真我はブラフマンなり)」。ヴェーダはまた、次のようにも宣言しています。「エーコーハム バフツシャーム(唯一なる者が多となることを意志した)」、ナ「エーカム サット ヴィプラー バフダー ヴァダンティ(絶対者なる者は一つである。しかし賢者はそれを異なる名前で呼ぶ)」。神は「唯一なる者」であり、それが「アハム」なのです。

心は多くの幻惑を生み出し、人は真実を忘れてしまいます。心の本質を理解することは、いかなる人にとっても不可能に近いのです。蠅や蚊はあらゆるものに付着しますが、火の周りには決して近づきません。同じように、心は物質的事物に魅了され、どこへでもさまよい、常に神から遠ざかります。心は、純粹で、エゴがなく、常に神に焦点が定まっていなくてはなりません。これが真の靈性修行です。すべての靈性修行は、心をコントロールするために行われるべきです。

「スラヴァナム(聞くこと)」、ナ「キールタナム(歌うこと)」、ナ「ヴィシュヌスマラナム(憶念すること)」、ナ「パーダセーヴァナム(御足の礼拝)」、ナ「ヴァンダナム(崇敬)」、ナ「アルチャナム(祈禱)」、ナ「ダーシャム(召し使いの態度)」、ナ「スネーハム(友人の態度)」、ナ「アー

トマニヴェーダナム（全託）」は、帰依の9つのあり方です。これら9つの帰依の道それぞれにおいて重要なことは、心を完全に神に任せなければならないということです。（ここで、バガヴァンはハンカチを見せながら尋ねられました）これは何ですか？ 「一枚の布です」と皆さんは答えるでしょう。しかしそれだけではないのです。これは糸の束でもあります。綿がよわれて糸となり、糸が織り合わさって布となります。同じように、あなたがたは一人の人物ではなく、3人の人物です。それは、「あなたが自分だと思っている存在（肉体）」、「他人があなただと思っている存在（心）」、そして、「真のあなた（アートマ）」です。あなたの真我は「私」です。それはブラフマンであり、神です。神には特定の名前や姿はありません。神は、「無相（ニルグナム）」、「純粹（ニランジャナム）」、「悠久（サナータナム）」、「最後の棲家（ニケータナム）」、「永遠（ニティヤ）」、「無垢（スツダ）」、「大悟者（ブッダ）」、「解脱者（ムクタ）」、そして「神聖の具現（ニルマラ スワルーピナム）」です。人が神につける名前や姿は、いかなるものであっても自己満足のためです。それゆえ、あなたがたはあらゆる姿の中に神を見る努力をしなければなりません。

「いつ来たのですか？」と聞かれると、皆さんは、「私は昨日来ました」と答えます。この「私」は「あなた」を指しているのでしょうか？ それとも「あなたの身体」を指しているのでしょうか？ 昨日来たのは「あなたの身体」であって、「あなた」ではありません。皆さんは、身体を自分だと思っているために、昨日来たと考えるのです。道を歩いているとき、たまたま足を滑らせて骨折してしまつたとします。そのとき、皆さんは「私の足は骨折している」と言うでしょう。この言葉をよく考えてみてください。あなたが、「私の足」と言うときには、「あなた」と「あなたの足」とは異なる存在である、ということの意味しています。つまり、「あなたは身体ではない」ということです。「私の身体」、「私の心」、「私の知恵」、「私の足」と皆さんは言いますが、それでは皆さんは誰なのでしょう？ このように内省していくことにより、これらすべてが真のあなたではないことに気づくでしょう。あなたの肉体はアーカーラ（姿）であり、真我であるあなたはアーナンダ（至福）なのです。「私」という原理は身体とは異なるものです。朝から晩まで、人は「私」の真の意味を理解することなく、この単語を用いています。貧困者であっても、億万長者であっても、「私」の原理はあらゆる人に共通しています。神は全宇宙に浸透しているのです。神はあらゆる人の中に「私」という形をとって存在しています。「私」があるところ、神が存在します。この真理を心に堅くとどめておきなさい。「アハム ブラフマー スミ（我はブラフマンなり）」と言うときは、「私」はブラフマーに先立ちます。したがって「私」が神の最初の名前なのです。

バリは高貴な王で、無私の心をもった熱心な帰依者でもありました。施しを求める者は小さき者である、と見なされていたので、主ナーラーヤナ神（ヴィシュヌ神）でさえも、バリ王からの施しを受けにいったとき、ヴァーマナ（倭人）の姿をとって行かなければなら

りませんでした。パクシ ヴァーハナ（ヴィシュヌ神、聖鳥ガルダを乗り物とする者という意）は、富の女神であるラクシュミーを胸に抱いていました。それでもヴァーマナ（倭人の姿をとったヴィシュヌ神）はたいへん小さくなり、バリ王から施し（ビクシャ）を求めました。ヴァーマナはたった三步の土地を求めました。身長が低いので、足はさらに小さかったのですが、ヴァーマナは三界を三步で行くことができました。バリ王の師であった賢者スクラチャリヤは、ヴァーマナの要求に屈しないよう注意を促しました。賢者スクラチャリヤは、その倭人は尋常の者ではなく、主ナーラーヤナ神御自身であることを見抜いていたのです。しかしバリ王は、いったんした約束を破ることは適切ではない、と言ってこの忠告に少しも耳を貸そうとはしませんでした。バリ王は、約束をしたからには何が起ころうともそれを果たしたいと思ったのです。バリ王は自分のグル（師）に背いてまで、神に自分自身を捧げました。神は無限の力を備えています。神にとって不可能なことはありません。ヴァーマナは三步の歩幅で三界をまたぎました。三界は「ブール・ブワッ・スワハー」で表されます。「ブール」は物質世界を、「ブワッ」は思考の領域、すなわち心（マインド）を、「スワハー」はアートマの原理をそれぞれ表します。人はこれら3つのものすべてを含有しています。

ケーララ（インド最南端の西半分を占める小さな州）は、犠牲の誕生地であり、帰依と献身の中心地です。この地では、物乞いが何も施されずに帰ることはありません。すべての人が自分のできる範囲で慈善を行います。このプンニャ ブーミ（美德の地）こそが、バリ王を生み出したのです。この世には、土地や家畜、食物や着物、黄金を寄進する人は大勢います。しかし、バリ王は自分自身を神に捧げることで、究極の犠牲を示しました。時間の経過と共に、変化は多少なりともあったかもしれませんが、しかしそれでも、ケーララは帰依と献身で名高い地であり続けています。ケーララはまた、主なる神の偉大な帰依者であった、プラフラダの生誕地でもあります。バリ王が神のためにグルの命令に従わなかったように、プラフラダもまた、父親の望みに反して神にすべてを捧げたのでした。こうした多くの神聖な魂が、この聖地ケーララに誕生しました。

現代科学は、全くの無知から神の存在を否定しています。神が存在しない場所はありません。神の目、足、手、頭、耳、口は、すべてのものに浸透しており、神は全宇宙に充滿しているのです。同じことが、プラフラダによって述べられています。「神はここにいてあちらにはいない、などとゆめゆめ思ってはならない。神をどこに求めようと、神はそこに存在する」（テルグー語の詩）。プラフラダは揺らぐことのない信仰をもっていました。ヒラニヤカシブ（プラフラダの父）は偉大な科学者でした。彼は太陽を旅し、星々にまで到達することができました。彼が北極星に触れたとき、地球は震えだしました。彼はそれほどの勇気を備えていたのです。今日まで、どの科学者もヒラニヤカシブの成し遂げたことを達成していません。一方、ヒラニヤカシブはそうした知識と勇気を持ちあわせ

ながらも、神性を理解することができませんでした。愛によってのみ神を理解することができます。神に到達する道は、それ以外にはありません。愛のみが、神に全託することを可能にします。

愛の化身の皆さん！

「私」と愛は一つであり同じものです。人は愛なしに存在することはできません。愛はあらゆる人の中にある「私」として輝いています。電流がなければ電球は光りません。同じように、「私」がなければ身体は機能しません。「私」があってはじめて、目は見ることができ、耳は聞くことができます。「私」があってはじめて、舌は話すことができます。「見る」のは目ではなく、目を通して「私」が見るのです。目を閉じれば、何も見ることはできません。目に存在する光は神なのです。実際、神が存在しないところはありません。あらゆる名前と姿は神の顕れです。したがって、あなたが敬意を表する相手が誰でも、それは神に届くことになり、誰かを中傷するなら、それもまた神に達することになります。

愛の化身の皆さん！

他の人から尊敬されたいと思うなら、まず、あなたが他の人を尊敬しなくてはなりません。同様に、あなたがあらゆる人を愛するなら、あらゆる人があなたを愛することでしょう。愛は「私」の原理です。このことを、あなたのゴールとして心にとどめておきなさい。どの家にも、部屋ごとに明かりをつけるスイッチがあります。これらすべてのスイッチは、一つのメインスイッチによって管理されています。同様に、目、耳、舌などは、「私」というメインスイッチによってコントロールされる、さまざまなスイッチなのです。このメインスイッチがオンになってはじめて、身体中の各部位に生命が行き渡るのです。この「私」こそが真理です。真理は神であり、神は真理です。愛は神であり、神は愛です。この真理を理解し実践するなら、他の霊性修行は必要ありません。神は永遠の照覧者であり、私たちの思いと言葉と行動をじっと見守っています。人はみずからが選んだ名前と姿において神を崇拜します。実際、あらゆる姿は神から生まれました。ですから、すべての人を愛し尊重しなさい。愛を拡大することが人生です。心を狭くしてはなりません。「すべての生物の中で、人間として生まれてくることは最も稀有な（ジャントウナー ヌラジャンマ ドゥルラバム）」。「神は人間の姿をとる（ダイヴァム マヌーシャル ペナ）」、肉体のみを考えれば、こうした金言は信じられないかもしれません。重要なのは、内なる真理である「私」であって、肉体ではありません。市場に買い物に行くと、犬や猫、鹿などのさまざまな形をした砂糖菓子が売られています。どんな形であろうと、これらの砂糖菓子の値段は2アナです。「猫」は惹かれる子どももいれば、「鹿」がお気に入りの子



どももいます。違いは名前と形だけで、中身の砂糖はすべて同じものです。2 アナは、外側の形にではなく、その中に入っている砂糖に対して払われるのです。子どもだけが名前と形に惹きつけられます。同じように、通常、人は名前と形に惑わされています。一方、真のサーダカ（修行者）または帰依者は、根本原理を視野に捉えています。名前や形に夢中になってはいけません。真我の本質を知り、真我への愛を深めなさい。真我は、「アハム」、もしくは「アートマ」、あるいは「私」として知られています。名前や形は異なりますが、根本原理は一つであり、同じものです。いったんこの真理を理解すれば、人は神へと変容します。人にはあらゆる力が備わっています。実際、人は神なのです。だからこそ、神は常に人の姿に似せて描かれるのです。すべての人がフリダヤ（ハート）を備えています。ダヤー（同情）あるいはカルナ（慈悲）に満ちているものがフリダヤです。人がハートを慈悲で満たすとき、この上ない平安が世界を支配し、嫉妬や憎しみや怒りは微塵も見られなくなるでしょう。心を慈悲で満たしている人は常に平安です。人はフリダヤを肉体における心臓であると勘違いしています。フリダヤとは、至る所に遍満する「アートマの原理」であり、「アハム」なのです。高価なものを泥棒の手に届くところに置く人はいません。ところが人は、慈悲、忍耐、愛といった貴重な宝石を、盗人に例えることのできる心の管理下に置いてしまっています。盗人の手の中に高価な宝石を置き去りにしてしまえば、どうやってそれを取り戻すことができるのでしょうか？ それは不可能です。美德という高価な宝石は、フリダヤ（ハート）という金庫の中に保管されなければなりません。決して、盗人である心に管理を任せてはなりません。しかし、それこそ今日人々が行っていることです。人は心の命ずるままに行動しています。心を基盤として、すべての行動を起こしているのです。心に従う人はまさしく盗人です。心ではなく、知性に従いなさい。そのときはじめて、「アートマの原理」を理解することができます。ティルトンダ アルワルは「ハートを清らかにして（チッタ シュッディ）、神を崇めなさい」と言いました。心の命令に従ってはなりません。心は常に不安定だからです。あらゆる人が高貴な資質を備え、純粋な思いをもつことができます。それらは高価なダイヤモンドのようなものです。しかし、人は心にそれらの管理を任せているのです。その結果、霊的に進歩することができないでいます。真実と愛を基盤としなさい。真実の一つであり、時間や空間によって制限されるものではありません。真実と愛という、永遠で不変の原理を人生の基盤と見なすことができたとき、はじめて人は平安と至福を体験することができるのです。

（先ほどお話をされた）二人の大臣は、私にケーララ州を訪れるよう祈りました。今回、私は必ずケーララ州に行きます。そればかりでなく、今年から、ケーララ州は科学とテクノロジーの分野で発展するあらゆる機会をもつことでしょう。人々は、カルナータカ州とアーンドラ プラデーシュ州のみが科学とテクノロジーにおいて進歩しているという印象をもっています。しかし、ケーララ州はそうした州を追い越そうとしています。この点に関して、（ケーララ州の）首相さえもが、必要とされるあらゆるサポートを行うことを約

束しています。ケーララ州は高貴な立場を与えられることになるでしょう。バラタ（インド）の文化は、「真実を話し、正義を実践する（サッティヤム ヴァダー ダルマム チャラー）」ことを強く勧めるものです。ケーララ州は、真実と愛、そして正義の地です。だからこそ私は、今年必ずケーララ州を訪れるつもりです。ケーララ州の人々は優しい心の持ち主です。彼らは愛にあふれています。政治の世界では、言っていることと行っていることが異なっています。霊性は、思いと言葉と行動の一致を強調します。まもなく、ケーララは理想の州となるでしょう。ケーララ州は多くの点で一位に立ちます。モンスーンさえも最初にケーララの地に訪れ、そのあとで他の州に広がっていきます。そのような地は、神にとってもいとしいものです。人は神の臨在をケーララの地で体験することができます。シッダシュラマは、バリ王と、ヴァーマナ神、そしてジャマダグニ仙が生まれた場所です。シッダシュラマという名前は「達成と成功の場所」という意味です。聖仙ヴィシュワミトラがそこで苦行を行う決心をしたのはそのためです。シッダシュラマは彼の苦行によって、永遠の栄光を得ました。それだけではなく、多くの聖人や賢者がその地で誕生し、苦行を行ったのです。このことはあまり知られていません。ヴィシュワミトラは最初、王でした。その後、彼はすべてを放棄して苦行を行い、ラージャリシ（王仙）と呼ばれました。彼は、（自分が敵視している）ヴァシシュタがブラフマリシ（梵仙<sup>ほんせん</sup>）と呼ばれるのを見て、同じ称号を得ることを決意しました。人は憎しみを完全に放棄して、はじめてブラフマリシになることができるのです。ヴァシシュタは、ほんのわずかの憎しみももっていなかったために、ブラフマリシの状態を獲得することができたのです。ヴィシュワミトラもまた、怒りと憎しみを取り除いたとたんに、ブラフマリシとなりました。彼はシーターとラーマの聖なる結婚式を取り持ちました。プラクリティ（自然）とパラマートマ（神）を一緒にするという彼の望みは叶いました。結婚式が終わるとすぐに、ヴィシュワミトラは森へと立ち去りました。

愛の化身の皆さん！

すべての人を愛しなさい。誰をも憎んではなりません。あなたの敵さえも愛しなさい。あなたの中に少しでも怒りや憎しみがあれば、それらを愛に変容させなさい。そのとき、あなたもまた、偉大なりシ（聖仙）となることでしょう。

（バガヴァンは御講話を「プレーマ ムディタ マナセ カホー」のバジャンで終えられました。）

翻訳：石井 真

校正：青田 知久、小栗知加子